

仙台教会の週報の歴史

はじめに

教会の歴史を調べる上で大きな資料になるものは、毎週発行される週報です。週報には教会に関わる様々な情報が記録されているからです。週報はその週だけ役に立つのではなく、貴重な情報源として後々の時代まで「賞味期限」は続きます。ただ仙台教会の事務室（牧師室）には、1976年（昭和51）以前の週報は残念なことに全く保存されていません¹。もし昔の週報がしっかり保存されていれば、仙台教会の初期の様子をもっと生き生きと再現できたことでしょう。

昔の週報は当然ながら現物を保存するしかありませんでした。そのため劣化したり、紛失したり、分量が増えれば邪魔になったりと、保存もなかなかやっかひでした。しかし、今は電子データの時代です。ファイル名の付け方や保管ルールを明確にした上でデータを保存し、蓄積されるデータをしっかり継承さえすればいいわけですから、以前よりも週報の保存はかなり楽に行えます。50年後、100年後の皆さんに仙台教会の歴史を正しく知ってもらうためにも、週報の存在意義とその価値、そして保存の在り方を私たちは再認識すべきなのでしょう。

1. 仙台教会の週報の成長経過

実は仙台教会の週報は、キリスト教文化センター主催「教会週報・月報コンクール」（1975年）で特選を受賞しています²。それは天野五郎牧師が生み出した独特の週報スタイルと、カミワザ的な孔版技術の賜物でした。教会員は毎週「週報」を読むのを楽しみにしていたものです。

もちろん簡単にこの週報スタイルが出来上がったものではありません。このスタイルが生み出されるまでには、試行錯誤が色々と繰り返されてきました。天野牧師が福島教会から仙台教会へ赴任したのは1963年（昭和38）7月です。当時、仙台教会の週報作成を担当していたのは、東北大学の学生だった教会員の渡邊淳一さん、そして翌年からはその奉仕を青年会が引き継ぎ、更に1965年（昭和40）7月からは天野牧師が自ら担当するようになります³。その頃の仙台教会の週報は、紙面としてはB6縦×4頁（B5判用紙横二つ折り・横書き左開き）でした。1頁目の表紙と4

頁目の集会案内は固定した内容でしたので、その頁をあらかじめ印刷した用紙が大量に準備されていました。週報担当者は2～3頁部分に掲載する礼拝次第や報告などを、ヤスリ盤の上にのせたロウ原紙に、鉄筆でガリガリと音をたてながら書き、すでに半分印刷されている用紙に謄写版で刷り上げ、週報を完成させたわけです。

当然、天野牧師が週報作成担当を引き継いだ当初は、それを踏襲しました。しかし、固定部分を印刷した用紙の在庫が無くなったのを機に、同師はこれまで横書きだった週報紙面を縦書き右開きに変更し⁴、内容にも工夫を施しました。例えば、1頁目には先週の説教要旨、2頁目は集会案内や礼拝プログラムや報告事項、3頁目は証し等のスペースとして自由に使い、4頁目は牧会通信といった具合です。また、天野牧師の孔版技術は芸術的で完成度の高いものでしたので、これによって仙台教会の週報は、見た目にも内容的にも格段と豊かなものとなっていきました。

2. 読める週報、読みたくなる週報

天野牧師のすごいところは常により良い週報を目指し、「こうしてみてもはどうだろう」と思ったことは躊躇なく試したことです。週報の内容や構成だけではなく、スタイルや技術的なことも含めてそれは言えます。人並外れた孔版技術を身に付けていながら、1967、68年（昭和42、43）頃には和文タイプライター⁵に挑戦し、それを使って週報を作成したこともありました。オフセット印刷などという便利な機器にも関心を寄せ購入しています⁶。B5判用紙を横に用い縦書きで表面（おもてめん）だけの週報スタイルにしてみたり、また最初のスタイルに戻してみたりと、試行錯誤を繰り返すことを恐れませんでした。B4判用紙を縦に裁断し二つ折りする様式、つまり紙面としては、「B6横×4頁・横書き左開き」という独特の週報スタイルを編み出したのは1970年（昭和45）後半のことです。週報コンクールで特選を受賞したのはこのスタイルの週報です。その後もページ数を倍増し8頁にしてみたりと、工夫を怠りませんでした⁷。豊かな内容を盛り込んでいたために、どうしてもかなり小さな文字になってしまいますので、ページ数を増やすことで文字の大きさを改善しようとしたのです。天野牧師が「読める週報、読みたくなる週報」を目指し、週報作りに愛と情熱を注ぎこんだのは、「週報は伝道・牧会の力強いツールだ」という牧師としての確信があったからなのでしょう。

3. 共同作品としての週報へ

天野牧師が1984年（昭和59）7月で退任し、12月に金子純雄牧師が仙台教会に着任するまでの数カ月の専任牧師不在期間、執事たちが交代で天野式スタイルで週報の作成を担当しました。金子牧師着任後、天野式週報スタイルをなんとか継承したいと考えた私（小林）は、使命感をもって週報作成担当を買って出て何カ月間か挑戦しました。しかし、天野式週報はカミワザ的な孔版技術があつてこそ生きたものになり、読み易いものにもなります。残念ながらその技術を持ち合わせていない以上、まずは読み易さを優先すべきだと判断し、翌年の10月から紙面を2倍の大きさ（B4判用紙横二つ折り・横書き左開き）に変更することにしました⁸。この変更には伏線がありました。専任牧師不在期間に執事が交代で週報作成にあたった際、一人の執事は身体的な事情で細かな文字を書く作業が困難で、天野式週報スタイルの2倍の大きさの用紙で作成せざるを得ませんでした。これに対し教会のご婦人たちの間では、「この大きさの方がずっと読み易いわ」という声が囁かれていたのです。

その後ワープロやパソコンの発達で、週報作りも大きく様変わりしていきます。1987年（昭和62）1月からは全頁ワープロで作成するようになり、やがてパソコン時代の到来で週報作成担当者も向井田洋さん（1993～2011年）⁹、渡邊義人さん（2011年～現在）¹⁰と変わり、また2009年（平成21）1月からは、週報紙面はA4縦×4頁（A3判用紙横二つ折り）に変更されます。

さて、天野時代の週報はカミワザ的週報でしたが、現在の週報はそれに優るとも劣りません。それは何故かといえば、現在の週報は、大勢の教会員が力を合わせて毎週作り上げている「共同作品」だからです。礼拝プログラムや報告の原稿を整える牧師、北四番丁通信の執筆を担当する多くの教会員、毎週の献金を集計する財務委員の面々、毎週の礼拝出席者数を正確に記録する総務委員、週報の原版をパソコンで作る担当者、緻密な校正を担当する執事と教会員の面々、印刷をして週報ボックスへ配布する方、出来上がった週報を教会に来ることのできない会員宅へお届けする方、等々。現在の仙台教会の週報は共同作品として作り上げられ、用いられています。この点において私たちの教会の週報は、あの「カミワザ的週報」にも決して引けを取ることのない「宝物的週報」となっているのです。但しここで満足せず、「週報は伝道・牧会の力強いツールである」ことを皆で自覚し、恐れずに試行錯誤を繰り返し、更に良い週報を目指してまいりましょう。（文責：小林孝男）

1 「仙台教会歴史年表原表」のファイルの中に「週報保管状況」がまとめられている。教会には1977年からの週報しか保存されていないが、個人保管のものを含めれば1963年まで遡って週報を確認できる。

2 週報(1975/01/26、1979/11/11)

3 復刻版週報_週報及び復刻版について
この中に週報に関する天野五郎牧師のコメントが書かれている。

4 同上

5 入手経緯は不明

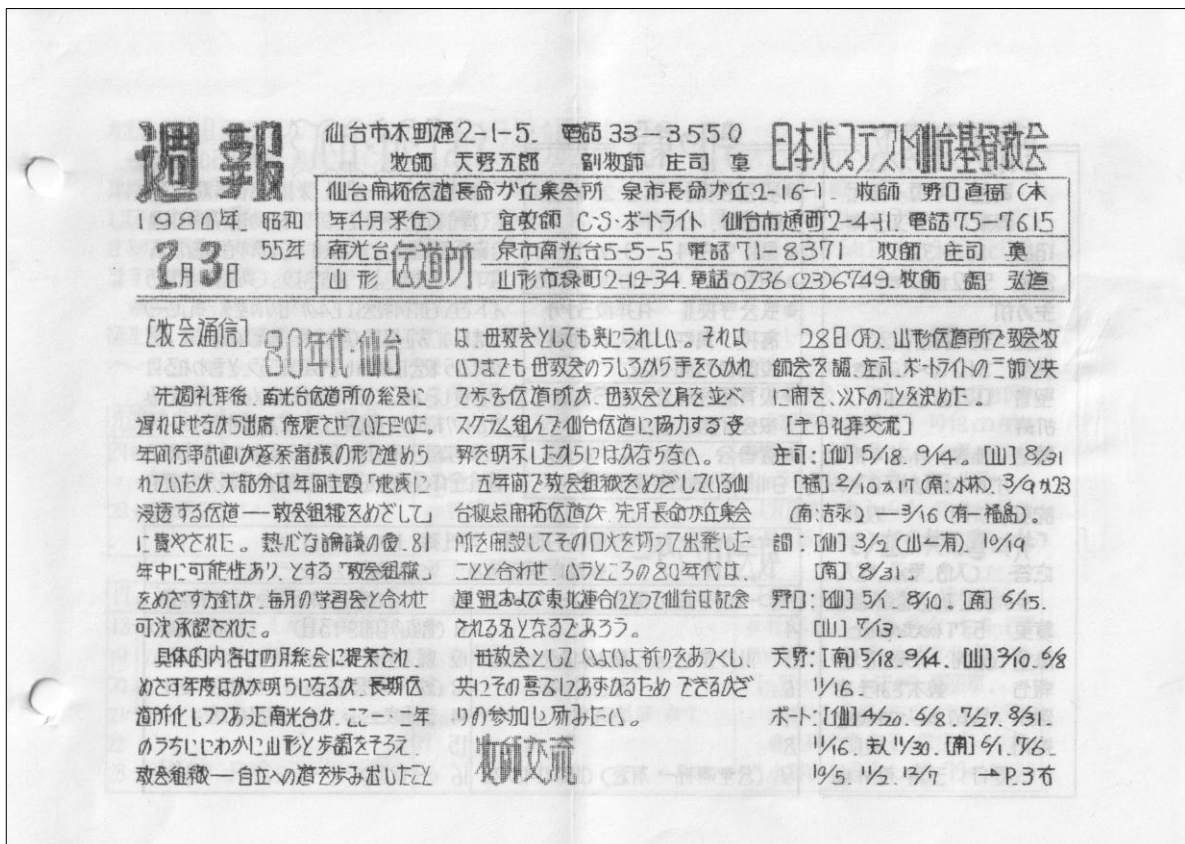
6 週報(1980/09/21)、幼稚園で購入。会堂脇の小室に設置される。「今後ここが盛んな活動が予想される伝道文書発行の印刷所となる」、と天野師は牧会通信の中で語っている。

7 週報(1981/06/14、1982/01/10)

8 週報(1985/10/06)

9 週報(1993/06/13)

10 週報(2011/03/27)



天野式週報スタイルの1 頁目